

阿山郡伊賀町野村

野添遺跡発掘調査報告

2003. 3

三重県埋蔵文化財センター

序

伊賀は秘蔵の国と言われ、多くの謎を秘めた国であります。その謎のひとつに中世城館の多さが挙げられ、三重県内にある城館跡のうち実に6割がこの小国に存在します。ここに報告いたします野添遺跡がある伊賀町柘植地域は伊賀国北東部に位置し、古来より交通の要衝として栄えた場所で、多くの中世城館も確認されています。今回発掘された遺跡は、それらの城館跡とほぼ同時代の遺跡であり、その時代を解明するのに貴重な資料となりました。

しかし、野添遺跡は県営ほ場整備事業に伴い発掘調査された遺跡であります。したがって今回発見された遺跡は記録保存という形になってしまったのは残念ではありません。この失われた遺跡を生かしていくのは我々の責務であります。

発掘調査にあたっては、地元伊賀町の方々、伊賀町教育委員会、および関係各位から多大なご協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある対応に、心からの御礼を申し上げます。

2003年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例 言

- 1 本書は、三重県阿山郡伊賀町野村に所在する野添遺跡発掘調査にかかる報告書である。
- 2 本遺跡の調査は平成13年度県営ほ場整備事業（倉部川沿岸地区）に伴い、三重県教育委員会が三重県農林水産商工部から経費の執行委任を受けて実施した。
- 3 平成13年度調査および整理は次の体制により実施した。

調査主体	三重県教育委員会		
調査担当	三重県埋蔵文化財センター		
	調査第一課	主査兼第一係長	筒井正明
		臨時技術補助員	小林俊之
	資料普及グループ	研修員	松見直茂
発掘作業委託	(財) 三重県農林水産支援センター		
調査期間	平成13年11月7日～12月28日		
調査面積	1,100㎡		

- 4 調査にあたっては、地元の方々をはじめ、三重県農林水産商工部農業基盤整備課、伊賀地方県民局農林商工部、伊賀町土地改良区、伊賀町教育委員会からの協力を得た。
- 5 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課および資料普及グループ（平成13年度）、調査研究グループおよび情報普及グループ（平成14年度）が行なった。また本文の執筆はⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴを小林が行い、Ⅵについては森勇一氏（愛知県立明和高等学校教諭）に玉稿をいただいた。なお、写真撮影・全体の編集は小林が行なった。
- 6 現地の調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々から有益な御教示を受けた。
(順不同・敬称略)
中川甫（伊賀町文化財委員）、落合寛道（伊賀町教育委員会）、田中久生・境宏（青山町教育委員会）、津村善博（三重県立博物館）、森勇一（愛知県立明和高等学校）
- 7 本書の方位は、国土調査法の第Ⅵ座標系を基準とする座標北を用いた。
- 8 挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。なお、写真図版は縮尺不同である。
- 9 本報告書での用語は、以下のとおり統一した。
わん………「椀」「碗」「碗」があるが、「椀」を用いた。
- 10 本報告書での遺構番号は通番となっている。また番号の頭には、見た目の性格によって以下の略記号を付けた。
SB：掘立柱建物 SD：溝 SE：井戸
SK：土坑 SZ：不明遺構・その他 p：ピット・柱穴
- 11 当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

I 前言	小林俊之	1
II 位置と環境	小林	2
III 調査の成果～層位と遺構～	小林	8
IV 調査の成果～出土遺物～	小林	21
V 三重県野添遺跡から産出した昆虫化石	森勇一	24
VI 結語	小林	26

図版目次

第1図 調査区位置図	3	第13図 SK18 平面図・断面図	15
第2図 周辺遺跡位置図	5	第14図 SK19 平面図・断面図	15
第3図 調査区北壁・南壁土層断面図	9	第15図 S Z 9 平面図・断面図	16
第4図 調査区西壁土層断面図	10	第16図 S Z 9 石平面図・立面図	17
第5図 遺構平面図	11	第17図 SZ12 平面図・断面図	17
第6図 SB15 平面図・断面図	12	第18図 SD10 土層断面図	17
第7図 SB16 平面図・断面図	13	第19図 柱穴集中部平面図	20
第8図 SB17 平面図・断面図	13	第20図 出土遺物実測図	22
第9図 S D 2・3 土層断面図	13	第21図 伊賀の池状遺構	27
第10図 SE13 平面図・断面図	14	第22図 伊賀の池状遺構配置図	29
第11図 S K 1 平面図・断面図	14	第23図 中世居館の庭園遺構と伊賀の池状遺構	30
第12図 SK11 平面図・断面図	14	第24図 野添遺跡周辺の景觀復原図	32

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	5	第4表 S Z 9 内付設遺構一覧表	19
第2表 遺構一覧表	19	第5表 出土遺物観察表	23
第3表 掘立柱建物一覧表	19		

写真図版

PL. 1 調査区北部全景 調査区南部全景	PL. 6 S Z 9 内東側不明ビット群検出状況 S Z 12
PL. 2 SB 15・16・17 SD 2	PL. 7 SE 13 SD 10
PL. 3 SD 4・5 SD 5	PL. 8 出土遺物① 出土遺物② 表採遺物
PL. 4 SK 18 SK 19	PL. 9 SE 13 出土の昆虫遺体 (標本1) SE 13 出土の昆虫遺体 (標本2) SE 13 出土の昆虫遺体 (標本3)
PL. 5 S Z 9 全景 S Z 9 石出土状況	

I 前 言

1 調査に至る契機

野添遺跡は阿山郡伊賀町野村に所在する遺跡である。

この地域に平成13年度県営ほ場整備事業（倉部川沿岸地区）が行なわれることとなり、平成12年12月18日～12月26日に技師新名強を担当者として範囲確認調査を行なった。（当時は仮称柘植野村遺跡）

調査は76ヶ所の確認坑を設定して行なわれた。その結果26,000㎡について遺構が存在するものと判断した。

これを受けてその後関係部局と協議を重ねた結果、平成13年度事業予定地内については、工法を変更することにより遺跡の保存に努め、1,800㎡については発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

2 調査の経過

(1) 調査経過概要

当初の調査区はA地区とB地区の2ヶ所（第1図参照）であったが、B地区については2001年11月7日2ヶ所の確認坑を設定し調査を行なったところ遺構なし、と判断。A地区のみ本調査を行なうこととした。このため最終調査面積は1,100㎡となった。

調査区の現況は水田で、耕作土と水田の床土等遺構面までを重機で除去し、人力により遺構の検出と掘削を行なった。その際の現地調査作業では地元の以下の方々に大変お世話になりました。ここに御芳名を記して感謝の意を表します。

西田元春、愛川博、岡島久勝、澤井隆男、稲森正樹、余野幸子、岡島喜美子、中川圭子、余野あん、余野きぬえ、梅澤竹夫、西田靖、富田良成、増田胤久、鳥喰六三郎、富井きみ子、中田清子、中川喜代美、安岡道子、中森東、宮田高美、鳥喰美智子、稲置康

和、稲置 郁子（順不同・敬称略）

(2) 日誌抄

調査の経過に関しては以下の通りである。

- 2001年
- 11月1日 現地協議。
 - 11月7日 調査区北半表土除去開始。
 - 11月12日 遺構検出、掘削開始。
 - 11月14日 調査区南半表土除去。
 - 11月19日 S D 2の掘削。
 - 11月20日 pitの掘削は終了。SB15を確認。
 - 11月21日 調査区南半の遺構検出開始。
 - 11月29日 SZ9の掘削。SE13掘削開始。
 - 12月3日 SZ12の実測。
 - 12月4日 初の降雨中止。
 - 12月6日 またも雨で中止。
 - 12月7日 SD10の掘削。
 - 12月10日 SE13が深いため、調査最終段階での断ち割りを決定。
 - 12月12日 全景写真撮影。
 - 12月13日 またも雨で中止。
 - 12月14日 初の降雪。
 - 12月17日 清掃し直しての個別写真撮影。
 - 12月18日 遺構実測の準備。
 - 12月19日 遺構実測開始。
 - 12月20日 遺構実測の続き。午後より地元説明会開催。
 - 12月21日 雨で実測できず。
 - 12月25日 遺構実測終了。
 - 12月26日 ひょうが降る中でSE13の断削。
 - 12月27日 下層確認。
 - 12月28日 現場撤収。引き渡し。

(3) 文化財保護法等にかかる諸通知

当遺跡発掘調査にかかる関係法令の諸通知は、以下により行なっている。

・三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長

あて)

平成 13 年 9 月 28 日付け教生第 981 号 (県知事通知)

・文化財保護法第 58 条の 2 第 1 項 (文化庁長官あて)

平成 13 年 11 月 12 日付け教生第 243 号 (県教育長通知)

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知 (上野警察署長あて)

平成 14 年 1 月 17 日付け教生第 8 - 9 号 (県教育長通知)

(4) 遺構実測

遺構実測図・土層断面図については縮尺 20 分の 1 手描き実測を行なった。遺構実測図の基準点は国土地標に基づいている。また各遺構の詳細な実測図が必要なものについては縮尺 10 分の 1 手描き実測を行なった。

(小林俊之)

3 調査の方法

(1) 地区割

調査区内における地区割は 4 m 方眼で設定しており、西から東へアルファベットを、北から南へ数字を与え、各北西角をグリッド名称とした。なおこの地区設定は任意のものであり、国土地標とは合致しない。

(2) 遺構カード・遺構略測図

三重県では遺構カードを作成している。これは前述の地区毎に作成するもので、遺構検出後、掘削するまでに記入し、遺構の重複関係、埋土の色調・状態などを明示している。遺構番号については、掘立柱建物、溝、土坑などは遺跡全体の通し番号とし、柱穴については地区毎の通し番号をつけることとした。またこの遺構カードを基にして縮尺 100 分の 1 の略測図を作成した。

(3) 写真撮影

遺構の写真撮影は原則として 6×7 版 (モノクロ・カラーポジ) を、補助的に 35 ミリカメラを使用した。使用したカメラは、アサヒペンタックス 6×7 II、ニコン FM 2 である。使用したフィルムはフジ NEOPANACROS 120・135、フジ PROVIA 120・135 である。

遺物の写真撮影は 4×5 版 (モノクロ) で撮影した。使用したカメラは TOYO-VIEW 45 G II である。使用したフィルムはフジ NEOPANACROS 100 である。



第1図 調査区位置図 [■は試掘坑] (1 : 2,000)

Ⅱ 位置と環境

1 地理的環境

野添遺跡（A）は三重県阿山郡伊賀町野村字野添に所在する。

伊賀町は旧伊賀国の北東部に位置し、東は鈴鹿山脈と布引山脈で伊勢国と、北は近江国と接している。町域の中央には、鈴鹿山脈に源を発する柘植川とその支流が形成した河岸段丘が広がる。野添遺跡も柘植川・倉部川によって形成された河岸段丘上に立地している。

当遺跡の所在する野村は、東に柘植町、西に中柘植、下柘植とあるため、広義の「柘植」であると言える。この「柘植」は伊賀町の北東部のことで、旧伊賀国の中でも寒さが非常に厳しい。

遺跡の北には丘陵地があり、その北側は滋賀県となる。南には標高765.8mの霊山が存在する。霊山は古来より信仰を集めた山で、現在山の中段西側には霊山寺があり、山頂には奥院が存在する。この山頂では昭和27（1952）年3基の経塚（B）が発見されている。また奥院石室内の聖観音立像の台石には水仁3（1295）年の銘のある宝塔の一部が使用されており、周辺には五輪塔も散乱することから、山頂付近には中世寺院が存在したことが考えられている。

現在の交通に目を移してみると、道路網では町の東西に名阪国道と国道25号線が走り、伊賀町野村で国道25号線と県道伊賀草津線が交差する。県道伊賀草津線は滋賀県と伊賀を結ぶ主要道路のひとつで、名阪国道の渋滞時には名神高速へ向かう車が多く往來する道路である。鉄道網では町の東西にJR関西本線が走り、柘植町にはJR草津線との分岐駅である柘植駅がある。いずれを使っても柘植・野村へ来ることになり、交通の要衝であると言える。

2 古代の官道・近世の街道

前節でも述べたように、野添遺跡周辺は現在でも

交通の要衝である。では歴史的に見た場合どうなのか。ここでは先学の成果から現伊賀町域の古代の官道と近世の街道についてまとめることとする。

伊賀町域が最初に確認されるのは、『日本書紀』天武天皇元年条の「積殖（柘植）の山口」「倉歴道」である。

壬申の乱で大海人皇子一行は吉野を脱した後伊賀へ入り、「曾明至菟野野。暫停駕而進食。到積殖山口。高市皇子自鹿深越以遇之。（中略）越大山至伊勢鈴鹿。」とある。

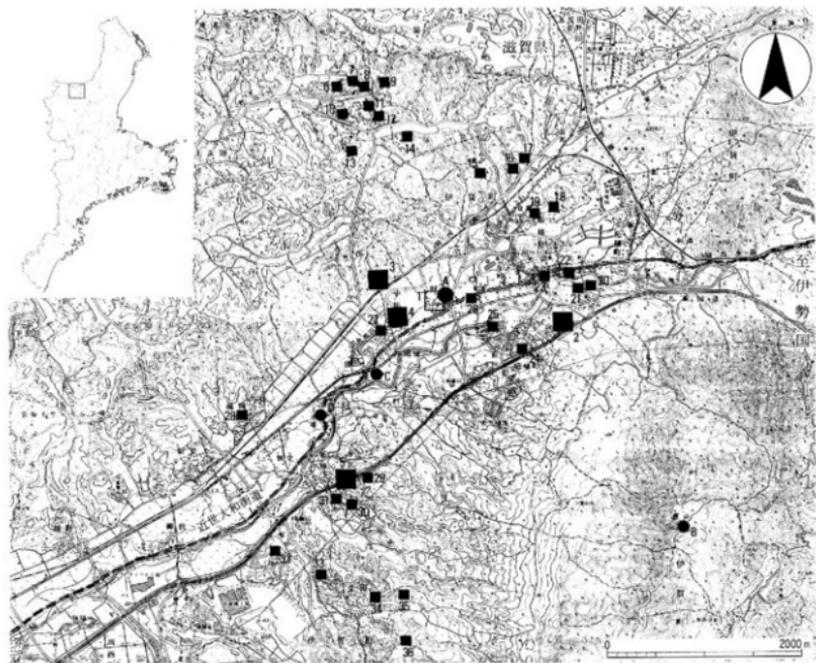
菟野（たらの）は現在の上野市荒木付付近ではないかと言われており、その後「積殖山口」へ来て鹿深を越えてきた（甲賀方面から来た）高市皇子と会う。その後大山（加太の山か）を越えて伊勢国鈴鹿へ至っている。積殖の山口は柘植地内と考えられ、おそらく加太山を越える手前のどこかであると考えられる。この時既に柘植で大和と伊勢を結ぶ道と甲賀からの道が合流していたことが考えられている。

その後大海人皇子は美濃に入った後戦闘を始め近江方面と大和方面に兵を向け、大和への途中である倉歴に守りをつける記事が見られる。「倉歴」は「倉部」と考えられ、やはり柘植地内での道の合流が考えられている。

平安時代には都が京都に移ったことにより近江国から伊勢国を直接結ぶ現在の鈴鹿峠が開通したとされており、『日本三代実録』仁和2年5月条には「十五日癸巳。勅遣左衛門権佐從五位上源朝臣昇。六位一人。檢近江国新通阿須波道之利害。」とある。

ところが、それは平安京遷都から92年後の仁和2（886）年のことであり、遷都後92年間は甲賀から柘植へ来て、それから伊勢へ入ったことが『日本三代実録』仁和2年6月条に「廿一日己巳。伊勢齋内親王応取近江新道入於太神宮。仍下伊勢国知。又停伊賀国旧路頓宮。下伊賀国知。」とある。

伊勢齋王の群行路も新道を使うので従来の伊賀の頓宮を停める、という記事である。ここから平安京遷都後しばらくは近江⇒伊賀⇒伊勢のルートがあっ



第2図 周辺遺跡位置図 (1 : 50,000) [国土地理院「甲賀」「上野」「鈴鹿峠」「平松」1 : 25,000より作成]

A	野添遺跡	B	雲山山頂遺跡	C	斎宮芝遺跡	D	良福寺跡
1	野村城館群	2	福地城跡	3	北村氏城跡	4	北村氏館跡
5	日置城跡	6	峠西城跡	7	峠東城跡	8	松山氏堡跡
9	松本堡	10	内山城跡	11	堀井堡	12	鳥堡
13	沢城跡	14	筑後城跡	15	北谷西城跡	16	北谷東城跡
17	平谷城跡	18	宮の前城跡	19	浜地城跡	20	左近宅址
21	右近宅址	22	臼井宅址	23	富田宅址	24	山出城跡
25	松尾宅址	26	梅田氏館跡	27	藤島宅址	28	大井城跡
29	米地城跡	30	広芝城跡	31	高島城跡	32	日置彈正城跡
33	日置城跡	34	竹島城跡	35	遊山城跡	36	高塚宅跡

第1表 周辺遺跡一覧表

たことが考えられている。この「伊賀国旧路頓宮」の候補のひとつが、中柘植にある斎宮芝（さいかし）遺跡である。(C)しかしこの遺跡からは平安時代前期の遺物は確認されず、古墳時代の遺物が出土している。

なお『日本三代実録』では新道のことを「阿須波道」（あすはみち）と書いているが、現在の地元の古老の中には甲賀から柘植へ来る道を「阿須波道」と呼ぶ人もいる。「阿須波道」とは一般名称としての東海道のことと考えられ、鈴鹿峠開通以前の名残りであることが考えられる。

近世に入ると、全国の諸街道が整備される。伊賀町域にも大和街道が通った。柘植には上柘植宿が置かれ、現在も本陣跡や文化12（1815）年開設の心学道場麗沢舎跡が残る。

本節では古代と近世の交通について触れたが、遺跡の中心となる中世については不明点が多く、あえて触れなかった。しかし、中世城館の分布から上柘植～中柘植までは近世の街道に近い場所を通っていたことが推察される。また下柘植についても「上市場」の地名や「西大寺詣国末寺帳」に記載される「トクキ良福寺」ではないかとされる良福寺跡（D）の存在から近世の街道に近い場所を通っていたと考えられるのではないかと。

3 土豪と中世城館

ここでは、遺跡の中心時期となる中世後期に絞って歴史的背景とその遺跡を見てみたい。

中世後期の伊賀は、室町幕府によって仁木氏が守護として任命されていたが、その影響力は弱く、在地領主ないしは小領主層（土豪・地侍層）が分立していた。各在地ではそれらを中心とする結合組織が形成されていたようである。代表格は『満濟准后日記』正長2（1429）年2月16日及び同23日条に見える「柘植三方」である。また同記によって柘植三方は日置方・北村方・福地方であることがわかる。

現在伊賀町内には約130の中世城館が確認されている。小林秀氏は、伊賀国の「方」集団は城館の分布の在り方とも密接に関係する、とし、遊山城周辺部の例を挙げ、「福地城や日置城をそれぞれ福地

方・日置方の中心城郭と考えて、辺りに点在する多くの城館の分布を、「方」集団と関連付けて把握することも可能である」と考えている。これを反映させると、柘植三方の日置方・北村方・福地方はそれぞれ下柘植・中柘植・上柘植を本拠とする集団であった、と推測できる（2～5）。

野村については、その名の初見は万治元（1658）年の『定一札之事』に見られるものであり、それ以前の状況については不明である。ただし中世の野村は、上柘植と中柘植の間にあることから上記の柘植三方とは決して不可分ではなかった、と考えられる。

ところで伊賀の中世後期と言え、伊賀惣国一揆のことが挙げられる。伊賀惣国一揆はこれまで石田善人氏らをはじめ多くの研究者によって扱われてきた。それによって、前述のように在地での結合組織の連合であること、軍事的な緊張の高まりを前提として作成されたものであり、諸集団を強固に規制しようものではなかったこと、などが明らかになってきている。

それらの方集団と「伊賀惣国」との関係については不明点が多いが、『山中文書』某書状断簡に「福地」の名が見えること、『甲賀郡和田西川文書』にも「上柘植」が見えることから、伊賀惣国に北伊賀が含まれていたことが考えられ、広義の柘植が伊賀惣国に含まれていた可能性は十分に考えられよう。

もう1点、中世後期の伊賀と言え、天正伊賀の乱が挙げられる。天正伊賀の乱は、織田信長軍の伊賀侵攻のことで、『多聞院日記』による信長の伊賀侵攻は天正9（1571）年9月3日に始まり、同17日にはほぼ終結、10月17日には「伊賀之陳悉了」としている。天正伊賀の乱は、従来信長の徹底した弾圧が語られてきているが、同記9月17日条には「伊賀一円落居、合戦モノク嘘ニテ諸城ヲ渡テ破城云々、南二・三ヶ所ノコロコト云々」とあり、榎本氏は戦わずして降伏したことを指摘している。

野添遺跡の南西600mには野村城館群（1）と呼ばれる中世城館密集地がある。この城館群は鳥喰宅址、富井宅址、増田宅址から成る。また現在富田良成氏宅の東端にも土塁が見られる。富田氏によるとかつては屋敷を圓形で土塁が存在したらしい。

この他にも柘植には多くの中世城館が見られ、一部ではあるが発掘調査もされている。

中でも特筆すべきものは福地城跡(2)で、伊賀有数の規模と複雑な縄張りをもつ。遊山城跡(35)、高塚宅跡(36)も発掘調査されている。

発掘されていないものでも北村氏城跡(3)、北村氏館跡(4)、浜地城跡(19)が見られ、比較的良好な中世城館も多い。

これらの城館群居住者の惣国一揆や天正伊賀の乱との関係は不明だが、前節でも述べたように、柘植や野村の地は北や東から伊賀国内に入る時には最初の場所であり、決して無関係ではなかった、と考えられる。

(小林俊之)

【註】

- ①『伊賀町史』(伊賀町、1979年。)
- ②石部正志・中川甫ら『雲山山頂遺跡予察調査報告書』(伊賀町教育委員会、1986年。)
- ③石部正志・中川甫ら『雲山山頂遺跡発掘調査報告』(伊賀町教育委員会、1990年。)
- ④『新訂増補国史大系 日本書紀 後編』(吉川弘文館、1932年。)
- ⑤前掲④

- ⑥『新訂増補国史大系 日本三代実録』(吉川弘文館、1934年。)
- ⑦前掲⑤
- ⑧古水康夫『倉芝遺跡出土の遺物』(『葛碑前古墳発掘調査報告』伊賀町教育委員会、1977年。)
- ⑨愛川博氏の御教示による。
- ⑩『歴史の遺報告書大和街道・伊勢別街道・伊賀街道』(三重県教育委員会、1983年。)
- ⑪『明徳二(1391)年九月廿八日書改了』の奥書をもつ(西大寺所蔵)。
- ⑫西澤裕幸『阿山郡伊賀町良福寺跡』(『火山遺跡・山神遺跡・良福寺跡・高寺南遺跡』、三重県埋蔵文化財センター、1996年。)
- ⑬橋本紀昭『伊賀国守護と仁木氏』(『三重大学教育学部研究紀要』38。)
- ⑭続群書類完成会
- ⑮小林秀『遊山城跡』(『森脇遺跡(第4次)・遊山城跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1995年。)
- ⑯阿山町城美築氏蔵。
- ⑰石田善人『甲賀郡中惣と伊賀惣国一揆』(『史忠』21)に所収。
- ⑱前掲⑯。
- ⑲石田善人『甲賀郡中惣と伊賀惣国一揆』(『史忠』21)に所収。
- ⑳石田善人『甲賀郡中惣と伊賀惣国一揆』(『史忠』21)に所収。
- ㉑橋本紀昭『至町・織田期の伊賀国』(『国立歴史民俗博物館研究報告第17集』、1988年。)
- ㉒『多聞院日記』(注書之助編『増補続史料大成』角川書店、1967年。)
- ㉓前掲⑯文獻。
- ㉔『城館調査の記録』(伊賀中世城館調査会、2000年。)
- ㉕富田良成氏の御教示による。
- ㉖駒田利治『福地城跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1982年。)
- ㉗前掲⑯
- ㉘吉澤良『高塚宅跡』(三重県埋蔵文化財センター、1994年。)
- ㉙『三河地誌』や『伊賀紀』には鳥塚、地田、宮井各氏の名が見えるが、後述の記述であるため史料の信用度は低い。

Ⅲ 調査の成果～層位と遺構～

1 基本層序

調査区土層断面図は調査区の北・西・南壁で作成している。

第1層(北1、南1、西1)は調査前水田時の耕作土である。

第2層は黄灰色土・灰色粘質土(共に黄色砂質シルトブロック含む)(北3、南2、西3・4)で旧耕作土、第3層は褐色土(北5)もしくは黒褐色土(南9、西5)で、遺物包含層である。その下に明黄褐色砂質土・粗砂があり、地山と考えられたため、この面を遺構検出面とした。西壁の北部は粘性の強い黒色シルトの上で遺構が見られたため、この面で検出した。

黒色シルト・明黄褐色砂質土・粗砂の下は砂と粘質土の互層を経た後、明赤褐色粗砂となり、これより下には遺構・遺物はない。

2 検出した遺構

今回の調査で検出したものに掘立柱建物・溝・井戸・土坑・不明遺構などがある。次にこれらについて時代順に説明する。

ちなみに本報告では第19図に柱穴集中部分の縮尺100分の1平面図を掲載した。これは榊原滋高氏の指摘に基づき掘立柱建物検討用の白地図として用意したもので、^①それと同時にピットの遺構番号を掲載したものである。本報告では掘立柱建物を十分に検討したとは言えない。大方の叱咤を願うものである。なお本来ならば調査区全体を載せるべきであろうが、今回は柱穴集中部分のみ掲載したことをご容赦願いたい。

〈中世後期の遺構〉

掘立柱建物

SB15 b5～d7区にかけて検出した4間×2間の総柱掘立柱建物である。梁行5.8mで柱間は2.9m+2.9m、桁行9.4mで柱間2.2m+2.5m+

2.4m+2.3mである。面積は54.52㎡。東西棟で軸方向はN4°Eである。

今回検出した建物跡の中では最大の規模を持ち、また唯一の総柱構造である。柱穴には掘形を持つものをいくつか確認している。

柱穴の出土遺物から15～16世紀代の遺構と考えられる。

SB16 b5・a6～c6区で検出した3間×2間の側柱掘立柱建物である。梁行3.4mで柱間は1.7m+1.7m、桁行7.4mで柱間2.4m+2.5m+2.5mである。面積は25.16㎡。東西棟で軸方向はN2°Eである。

北側の柱列には柱穴に掘形を持つものも見られる。

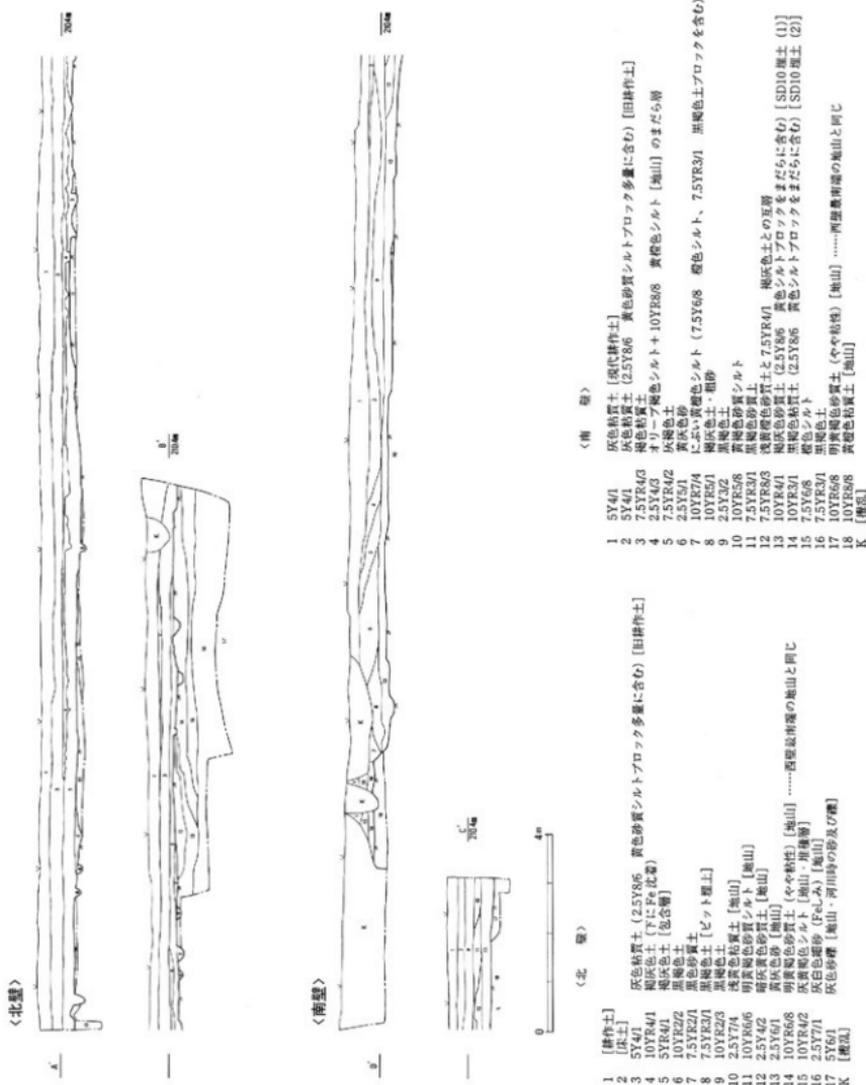
上記のSB15とは位置的に重複しており、建て替えを確認できるが、柱穴の出土遺物からは15～16世紀代の遺構としか考えられず、どちらが先行するのかは不明である。

SB17 d6～e6区で検出した1間×1間の掘立柱建物である。梁行1.9m、桁行2.8mである。面積は5.32㎡。南北棟で軸方向はN2°Eである。建物の中にあるSK1はSB17に伴うものと考えられる。柱穴の出土遺物から15～16世紀代の遺構と考えられる。

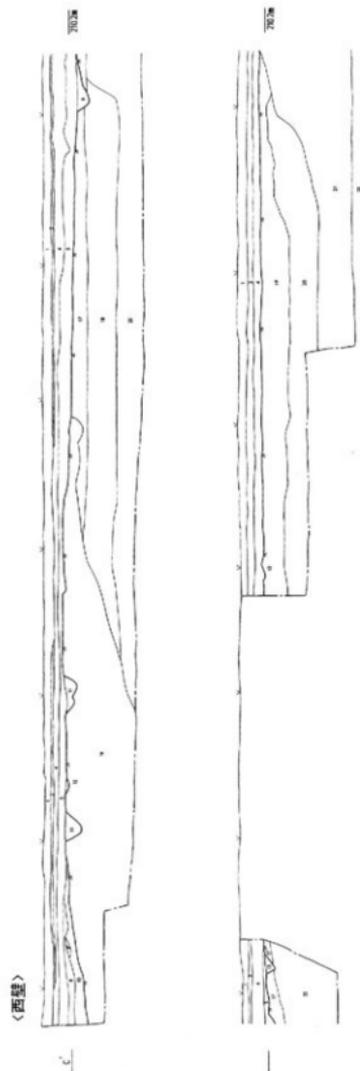
溝

SD2 調査区北部で検出した東西に走る溝である。幅は0.8～1.5m、深さは0.1～0.4mある。埋土は黒褐色土の単一層である。h3区で南へ曲がる逆L字形を呈し、g6～h6区で途切れる。SD3はSD2の埋土の変化によるものと考えられるが、切り合いの可能性もあり一応遺構番号を付しておく。出土遺物から15～16世紀代の遺構と考えられる。

SD4・5 ともに調査区東部で検出した溝で、調査区北半をSD4、南半をSD5としたが、同一遺構と考えられる。SD4は幅0.6～0.9m、深さ約0.15m、SD5は幅0.9～1.8m、深さ0.1～0.3mある。i5区からSD2・SD6と同一方向に走り、



第3図 調査区北壁・南壁土層断面図 (1 : 100)

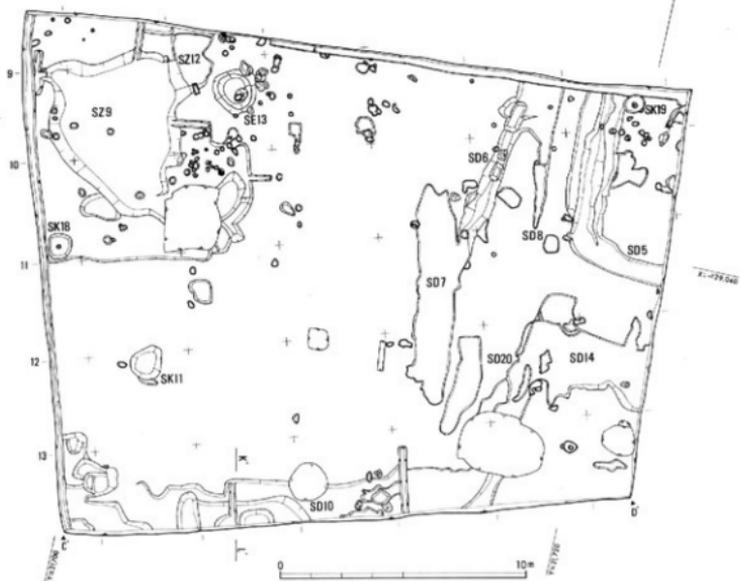
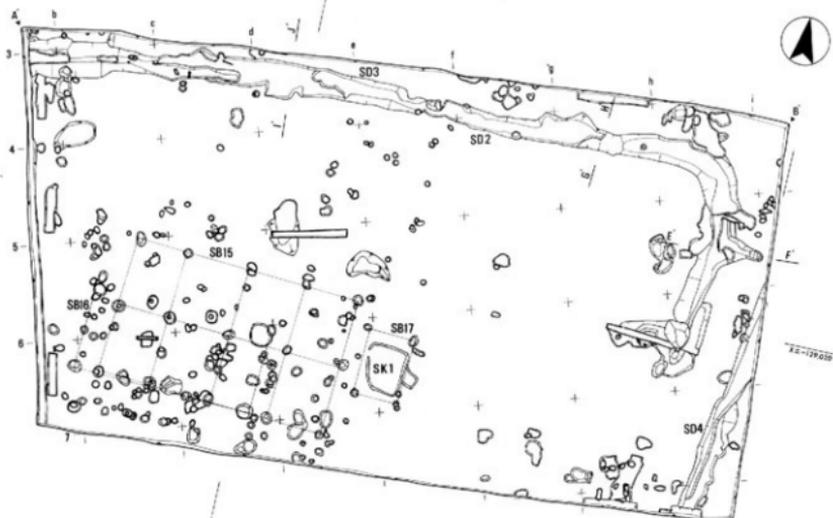


〈西壁〉

〔現代耕作土〕

- 1 〔床土〕
- 2 25Y4/1 黄灰色土 (25Y8/6 黄褐色シルトアロク多量を含む) [旧耕作土 (1)]
- 3 5Y4/1 灰黄色土 (25Y8/6 黄褐色シルトアロク多量を含む) [旧耕作土 (2)]
- 4 25Y3/2 黄褐色土 (下にFe沈着) [念富層]
- 5 25Y3/1 黄褐色土 (念富層)
- 6 5YR4/1 黄褐色土 (念富層)
- 7 10YR5/8 黄褐色粘質シルト
- 8 10YR5/8 灰黄褐色粘質土
- 9 10YR4/2 暗灰黄色粘質土
- 10 25Y4/2 黄褐色シルト (下にFe沈着)
- 11 25Y2/1 暗褐色粘質土
- 12 25Y6/4 暗褐色粘質土
- 13 10YR4/2 暗褐色粘質土
- 14 25Y2/1 黄褐色シルト
- 15 75YR3/1 黄褐色土 (25Y7/4 黄褐色粘質土 [燧山] アロクを多量を含む) [SD2 腐土]
- 16 10YR6/8 明黄褐色粘質土 (々々粘性) [燧山]
- 17 25Y7/6 明黄褐色粗砂 [燧山]
- 18 75Y7/1 灰黄色粘質シルト [燧山]
- 19 25Y2/1 黄褐色シルト (粘性强い) [燧山]
- 20 25Y4/4 黄褐色粘質土 [燧山]
- 21 5YR3/3 黄褐色粗砂 5YR6/6 [燧山] 黄褐色粘質土との互層 (砂は一部25Y7/8 黄褐色粗砂の部分あり) [燧山]
- 22 5YR5/8 明黄褐色粗砂 [燧山]

第4図 調査区西壁土層断面図 (1 : 100)



第5図 遺構平面図 (1 : 200)

g 11 区で東へ曲がる。埋土はSD 2と同じ黒褐色土の単一層である。出土遺物から15~16世紀代の遺構と考えられる。

SD 6 調査区南部 f 9 ~ f 10 区で検出した遺構である。g 7 ~ g 8 区で検出した遺構と同一遺構と考えられる。

幅は狭い部分で0.8m、広い部分で1.9mある。深さは0.12~0.15mほどしか確認していない。埋土はやや赤みがかかった黒褐色土で、SD 8との切り合い関係は先行していると判断したが、埋土の色調は

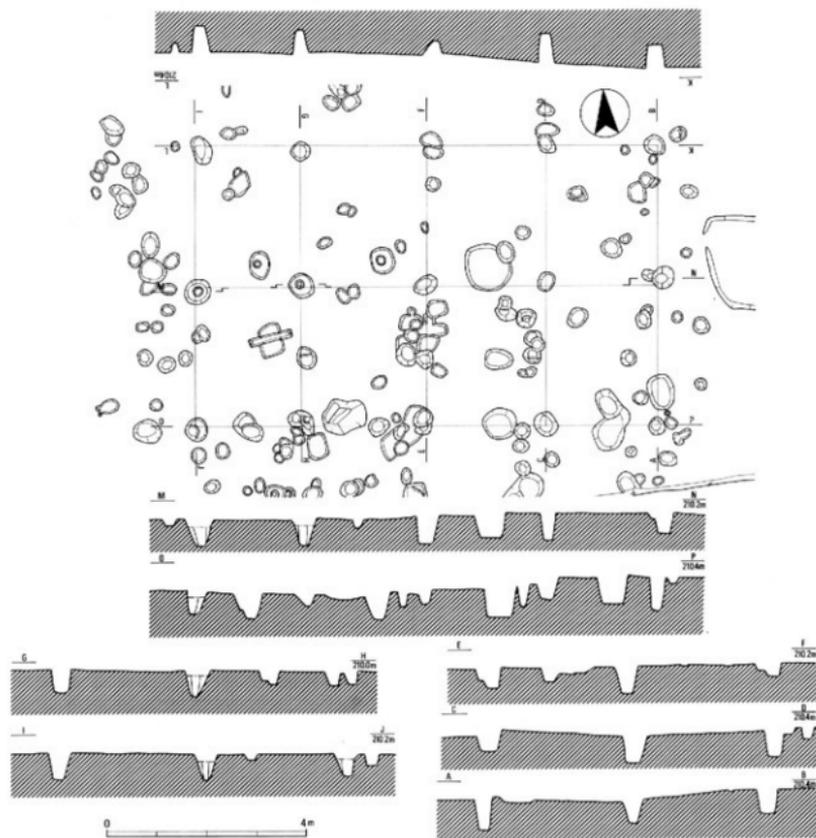
非常によく似ており、間違いもしくは切り合いなしの可能性も考えられる。

出土遺物から中世後期の遺構と考えられる。

SD 8 調査区南半 f 9 ~ f 10 区で検出した溝である。

幅は0.6m、深さは約0.1mで、南へ進むほどだんだん浅くなり、f 10 区より南側については不明である。埋土はやや赤みがかかった黒褐色土の単一層で、前述のように切り合いなしの可能性もある。

出土遺物から中世後期の遺構と考えられる。

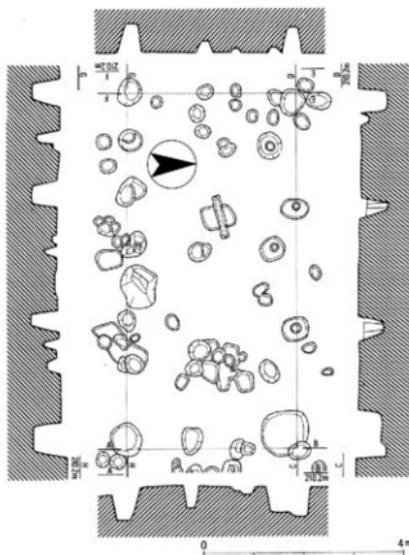


第6図 SB 15平面図・断面図 (1 : 100)

井戸

SE 13 調査区南部c9区で検出した井戸である。東西1.7m南北1.8m、深さは3.2m、底の絶対高は206.03mである。井戸枠等の施設はなく、素掘りのもので、断面は袋状を呈する。袋状になっているのは、井戸開削時または使用中に側面が崩落したことによるものと考えられる。また埋土5中には人頭大の礫が出土したが、これは廃棄時に投げ込まれたものと考えられる。

井戸の最下層からは曲物底板の形状をした木製品が出土しているが、用途としては不明であるため



第7図 SB 16平面図・断面図 (1: 00)

井戸の施設として使用されていたかは不明である。このためあくまで素掘りの井戸と考えたい。また最下層からは昆虫遺体も出土している。土器等の遺物から15~16世紀代の遺構と考えられる。

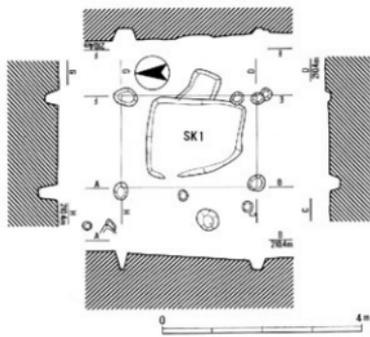
土坑

SK 1 調査区北部d6~e6区で検出された土坑で、東西1.5m南北2.0mの規模で形状は隅丸方形、深さは0.1mしかない。埋土は黒褐色土の単一層で、出土遺物から15~16世紀代の遺構と考えられる。

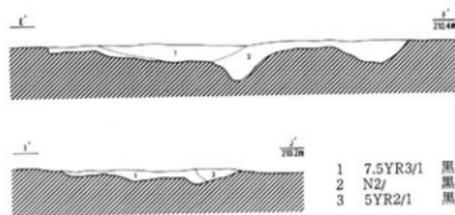
なおSB 17はこの土坑に覆屋的になる建物で、埋土は非常に類似し、ほぼ同時期に機能していた可能性は高い。建物内土坑と捉えたい。

SK 11 調査区南部b11~b12区で検出された土坑である。東西1.2m南北1.4m、深さは0.3mある。埋土は黒褐色土の単一層である。中世後期の遺構で11の地区より南側にあるのはこの遺構のみである。出土遺物から中世末期の遺構と考えられる。

SK 18 調査区南部a10区で検出した遺構である。後述するように緩やかな落ちもSZ 9に伴うと

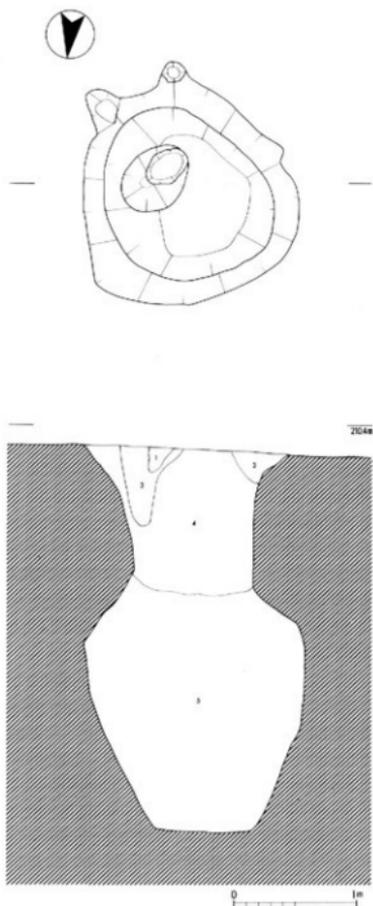


第8図 SB 17平面図・断面図 (1: 100)



- | | | |
|---|----------|--------------|
| 1 | 7.5YR3/1 | 黒褐色土 [SD2埋土] |
| 2 | N2/ | 黒色土 |
| 3 | 5YR2/1 | 黒褐色土 [SD3埋土] |

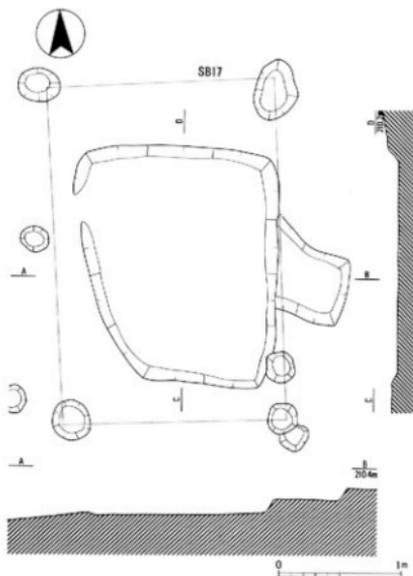
第9図 SD 2・3土層断面図 (1: 40)



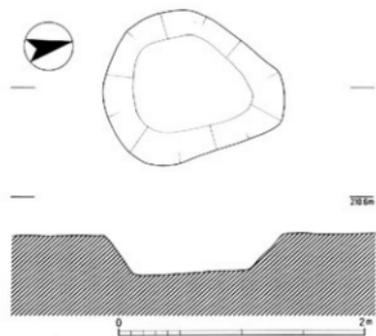
- 1 7.5YR4/1 褐灰色土 [P埋土]
- 2 2.5Y6/8 明黄褐色砂に4が混入 [P埋土]
- 3 5YR3/1 黒褐色粘質土 (炭含む)
- 4 2.5YR3/1 暗赤灰色粘質土 [SE13埋土]
- 5 7.5YR2/1 黒色粘質土 (植物・昆虫遺体多量に含む)
[SE13埋土]

第10図 SE13平面図・断面図 (1:40)

考えられることから、SZ9内の遺構として捉えることも可能である。径は約1.0mあり、土坑底の中央に径0.2mのピットがある。埋土は土坑部分ピット部分共に黒褐色粘土で、土坑部分の深さ0.9m、ピット部分の深さ0.3mある。埋土が同一であることから1つの遺構と考えられる。ピット底には何も



第11図 SK1平面図・断面図 (1:40)



第12図 SK11平面図・断面図 (1:40)

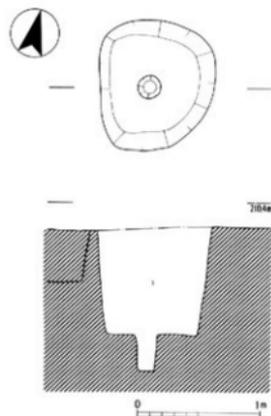
なく、機能は不明である。

時期については、遺物の出土はなく詳細は不明だが、SZ9と埋土が共通することからSZ9と同時期の遺構と考えられる。

SK19 調査区南部g9区で検出した遺構である。径0.8mの土坑で、SK18と同様に土坑底の中央に径0.2mのピットがある。埋土は土坑部分ピット部分共に黒褐色粘土で、土坑部分の深さ0.5m、ピット部分の深さ0.1mである。やはり埋土は同一であり1つの遺構と考えられるが、機能については不明。ただしSK19からはピット底の中央に小石が3つ集められるように存在していた。

時期については、やはり遺物の出土がなく詳細は不明。埋土の状況からSK18と同時期であると考えるのがよいであろう。

SK18・19共に他の遺構より埋土の粘性が非常に強かった。特殊な遺構であった可能性も高く、土壌サンプリングの必要があったろうが、今回は行っていない。



1 7.5YR2/1 黒褐色土 [SK18埋土]

第13図 SK18平面図・断面図 (1:40)

その他

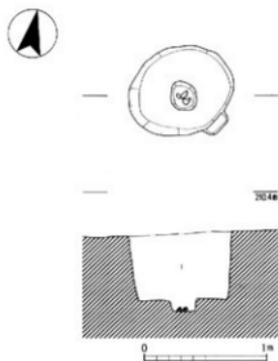
SZ9 調査区南部a8～b9区で検出した遺構である。東西9.2m以上南北10.2m以上、断面形態は南端から序序に下がっていき、ある地点で急に落ち込む。その深さは最大で約0.8mある。当初は単に掘り下げ足らないのかと思われたが、トレンチを入れてみたところ深さが0.8mあることが判明。急遽認識を変更し、遺構として掘削を行なった。

埋土は黒褐色粘土一層であり、掘り下げたところ南側でSK18を、北側でSZ12を、西側では溝状遺構を、東側では不明ピット群を、中央部では西に面を揃える石2つと不明ピットを検出した。

SK18とSZ12の詳細はそれぞれの項目を参照されたい。溝状遺構はちょうど攪乱が入り詳細は不明。調査区西壁土層断面にその一部がある。

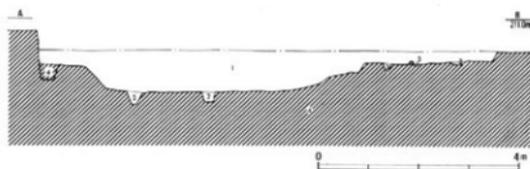
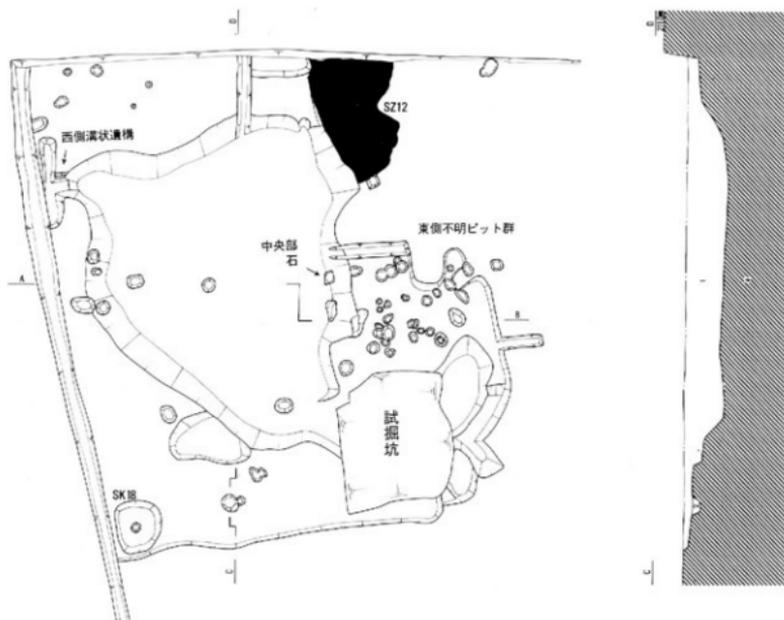
東側不明ピット群は全部で30のピットを検出した。検出状況は写真PL.6を参照されたい。埋土は茶褐色土と褐灰色粘質土の2種類があり、深さはほぼ10～20cmになる。ここからは遺物はまったく出土していない。

中央部石は西側に面を揃えるように検出した。ただしSZ9の底には接していないが、分層できなかった可能性が高い。もしも意図的なものであれば、石による護岸施設等の可能性が考えられる。



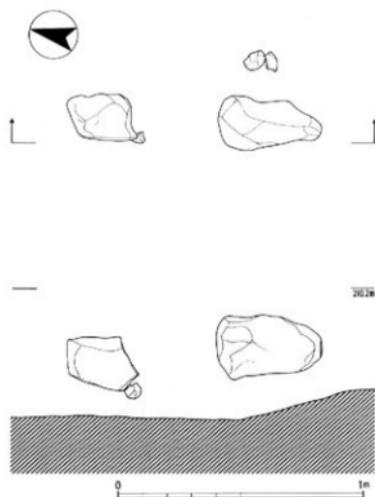
1 7.5YR2/1 黒色粘土 [SK19埋土]

第14図 SK19平面図・断面図 (1:40)



- 1 7.5Y3/1 黒褐色粘質土 [SZ9埋土]
- 2 褐灰色粘質土 [P埋土]
- 3 茶褐色土 [P埋土]
- 4 2.5Y7/6 明黄褐色粗砂 [地山]

第15図 SZ9平面図・断面図 (1:100)



第16図 SZ9石平面図・立面図(1:20)



1 7.5YR3/1 黒褐色粘質土 [SZ12埋土]
第17図 SZ12平面図・断面図(1:40)

中央部ビット群は全部で6のビットを検出した。SZ9の底ばかりでなく斜面でも検出しており、6つすべてが褐灰色粘質土を埋土としている。

SZ9内のビットについては東部と中央部の集中した箇所のみを挙げているが、SZ9内各所でいくつか検出している。このビットの性格についてはこれも含めた上での検討が必要であろう。

出土遺物は非常に少なく、土師器小片、瀬戸産と思われる陶器片、青磁片が出土したのみである。

この遺構の性格については第VI章で触れたい。SZ12 調査区南部c8区で検出した集石遺構である。ここでは別番号を付与しているが、東側不明ビット群らと共にSZ9の付設遺構とするべきだろう。東西は1.6m、南北は2.5m以上である。深さは0.1mしかなく、集石は遺構底には接していない。埋土は黒褐色粘土一層であり、SZ9と共通する。検出した石については、大きさは不揃いであり、まんべんなく敷かれている状態でもなく、調査時には意識的なものは感じられなかった。埋没時の投棄と考えるべきであろうか。

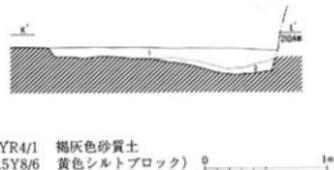
出土遺物は小片ばかりだが、土師器鏡片に器壁の薄いものが含まれている。またSZ9との関係からSZ9と同時期と考えるべきであろう。

〈近世の遺構〉

溝

SD7 調査区南部e10~e12区で検出した遺構である。幅1.5m、深さ0.05~0.19m、長さは9mしか検出できなかった。埋土は灰色土をベースに黄色シルト(地山)がまだらに混じる層であった。SD6との切り合い関係は先行する。

出土遺物には近世の陶器片が見られたため、近世



- 1 10YR4/1 褐灰色砂質土
(2.5Y8/6 黄色シルトブロック) をまだらに含む [SD10埋土]
2 10YR3/1 黒褐色粘質土 (2.5Y8/6 黄色シルトブロック) をまだらに含む [SD10埋土]

第18図 SD10土層断面図(1:40)

の遺構とした。

SD 10 調査区南部 a13～e13 区で検出した遺構である。幅 1.9m 以上、深さ 0.05～0.22m である。埋土は黄色シルト（地山）ブロックを含む褐灰色砂質土層と黄色シルト（地山）ブロックを含む黒褐色粘質土層の 2 層であった。平面図を見る限りでは SD 14 と一連の遺構と捉えられるが、後述するように SD 20 があるために詳細は不明。

出土遺物には染付片が見られたため、近世の遺構とした。

SD 14 調査区南部 f14～g14 区で検出した遺構である。幅 2.0～3.3m、深さは 0.08～0.19m である。埋土は灰色土をベースに黄色シルト（地山）がまだらに混じる層であった。

出土遺物には近世だと思われる陶器片が出土しており、近世の遺構と考えられる。

〈その他〉

SD 20 調査区南部 f12～e13 区で検出した遺構

である。幅 0.6～1.5m、深さは 0.05～0.1m である。埋土は明茶褐色土で、SD 10 や SD 14 に後行する。

出土遺物は見られなかったため詳細な時期は不明である。

風倒木痕 今回の調査では風倒木痕を多く検出した。平面図中の不定形な攪乱は掘削したもの、写真 P L. 1～2 の黒くなっている部分は掘削していないものである。

遺構の切りこみ面等は確認できず、時期は不明。しかし中世後期のものだとすれば、屋敷地内の庭木配置等の資料になったのかもしれない。

（小林俊之）

〔註〕

① 神原道高「柱穴の調査方法を考える～八戸市根城の調査・市浦村十三徳遺跡の調査から～」（『竪立と竪穴—中世遺構論の課題』東北中世考古学会第 7 回研究大会資料集、2001 年。）

報告番号	調査時番号	グリッド	性格	規模(単位:m)	時期	備考
SK1	SK1	e6	土坑	東西1.5×南北2.0 深0.1	中世後期	
SD2	SD2	a2~b2 b3 e3	溝	幅 0.8~1.5 深 0.1~0.4	中世後期	
SD3	SD3	c3 e3	溝	幅 0.3以上 深 0.05~0.08	中世後期	
SD4	SD4	h6 h7	溝	幅 0.6~0.9 深 0.13~0.18	中世後期	
SD5	SZ5	g10	溝	幅 0.9~1.8 深 0.1~0.3	中世後期	
SD6	SD6	f9 f10	溝	幅 0.8~1.9 深 0.12~0.15	中世後期	
SD7	SD7	e11	溝?	幅 1.5 深 0.05~0.19	近世	
SD8	SD8	f10	溝	幅 0.6 深 0.08~0.14	中世後期	
SZ9	SZ9	a8 b9	貯水 土坑	東西9.2以上 南北10.2以上 深 0.2~0.8	中世後期	
SD10	SD10	e13 f13	溝	幅1.9以上 深0.05~0.22	近世	
SK11	SK11	b12	土坑	東西1.2×南北1.4 深 0.3	中世後期	
SZ12	SZ12	c8	集石	東西1.6×南北2.5以上 深 0.1	中世後期	
SE13	SK13	c9	井戸	東西1.7×南北1.8 深 3.2	中世後期	
SD14	SZ14	f12 g12	溝	幅 2.0~3.3 深 0.08~0.19	近世	
SB15	SB15	b5~d7	掘立柱 建物	桁行 9.4 梁行 5.8	中世後期	掘立柱建物 一覽参照
SB16	SB16	b5- a6~c6	掘立柱 建物	桁行 7.4 梁行 3.4	中世後期	掘立柱建物 一覽参照
SB17	SB17	e6	掘立柱 建物	桁行 2.8 梁行 1.9	中世後期	掘立柱建物 一覽参照
SK18	SK18	a10	土坑	径 1.0 深 0.9と1.2	中世後期?	
SK19	SK19	g9	土坑	径 0.8 深 0.5と0.6	中世後期?	
SD20	なし	f12~e13	溝	幅0.6~1.5 深0.05~0.1	不明	

第2表 遺構一覽表

遺構番号	グリッド	性格	規模(桁行×梁行)	桁行(m)	梁行(m)	面積(m ²)	棟方向	時期	備考
SB15	b5~d7	掘立柱 建物	4間×2間	9.4 (2.2+2.5+2.4+2.3)	5.8 (2.9+2.9)	54.52	東西棟 N4°E	中世 後期	
SB16	b5- a6~c6	掘立柱 建物	3間×2間	9.4 (2.4+2.5+2.5)	3.4 (1.7+1.7)	25.16	東西棟 N2°E	中世 後期	
SB17	e6	掘立柱 建物	1間×1間	2.8	1.9	5.32	東西棟 N2°E	中世 後期	SK1(建物内 土坑)を伴う

第3表 掘立柱建物一覽表

遺構名	グリッド	規模等	埋土	備考
SZ12	c8	東西1.6m南北2.5m以上 深0.1m	黒褐色粘質土	
SK18	a10	径1.0m 深0.9mと1.2m	黒褐粘土	
西側溝状遺構	a9		黒褐色粘質土	
東側不明ピット群	c9-c10	ピット30個	黒褐色粘質土	
中央部石	b9	石2つ		
中央部ピット群	a9-b9-b10	ピット6個	褐灰色粘質土	

第4表 SZ9内付設置遺構一覽表

Ⅳ 調査の成果～出土遺物～

野添遺跡の出土遺物には土師器皿・鍋・羽釜、陶器鉢・甕、木製品、鉄製品、石製品がある。ほとんどの遺物が中世のものである。なお近世の遺物も少量あるが、ほとんどが小片で図化することができなかった。以下、遺構別に記述することとする。

SB 15 出土遺物 1は土師器鍋の口縁部である。南伊勢系のもので伊藤編年第4段階b型式のものである^①。

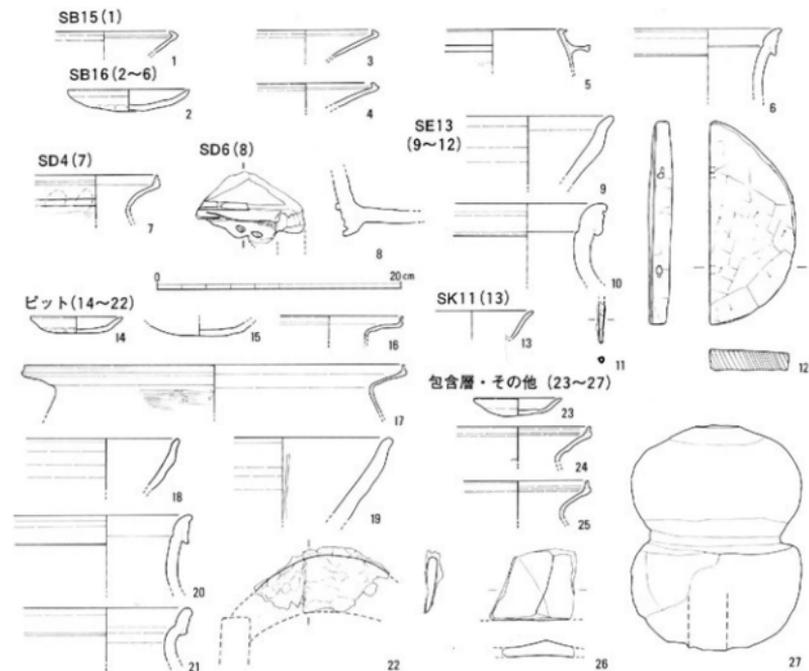
SB 16 出土遺物 2は土師器皿である。在地産のものと思われる。3～4は土師器鍋の口縁部である。南伊勢系のもので伊藤編年第4段階c型式のものである。5は土師器羽釜である。胎土から南伊勢系の

ものであると考えられる。6は陶器甕の口縁部で信楽産のものと思われる。木戸編年のKB3類に相当するものと考えられる^②。これらは主に15世紀代に属しよう。

SD 4 出土遺物 7は土師器鍋の口縁部である。南伊勢系のもので、伊藤編年第4段階a型式のものである。

SD 6 出土遺物 27は瓦質土器で鉢の底部と思われる。脚部の痕跡が見られ、平面形態は方形を呈していたものと考えられる。風呂谷館跡SD 14出土の火鉢に近い形状と考えられる^③。

SE 13 出土遺物 9は陶器練鉢の口縁部で色調は乳白色を呈する。信楽産のものと考えられ、山田編



第20図 出土遺物実測図 (1:4)

年のⅡ a 型式に相当すると考えられる^③。10は陶器
甕の口縁部で信楽産のものと考えられる。木戸編年
のTC1類に相当すると考えられ、16世紀中葉と
考えられる。11は釘と考えられる鉄製品で、断面
が方形を呈する。詳細は不明。12は木製品である。
一見曲物の底板のように見えるが、側面には木釘と
思われる痕跡が残る。使用用途については不明。

SK 11 出土遺物 13は土師器皿の口縁部である。
底部は残存していなかったが、体部に内側への盛り
上がりが見られ、いわゆるへそ皿であると考えられ
る。

各ピット出土遺物 14は土師器小皿である。15
は土師器皿の底部である。16～17は土師器鍋の
口縁部で、南伊勢系のもの。16は伊藤編年第4段
階e型式、17は第4段階c型式に相当する。18
は陶器碗。19は陶器措鉢の口縁部で播り目が1条
確認できる。山田編年のⅡ a に相当する。20～21
は陶器甕で信楽産のもの。20・21共に木戸編年

KB3類に相当する。22は鎌と考えられる鉄製品
である。

包含層・その他出土遺物 23は土師器皿である。
24～25は土師器鍋の口縁部で、南伊勢系のもの。
24は伊藤編年第4段階f型式に、25は第4段階f
型式に相当する。26は砥石か。27は調査区西側
の水田で表採した五輪塔の空輪風の部分である。

(小林俊之)

〔註〕

- ①以下南伊勢系の土師器類は下記の文献を参考にしている。
・伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」
〔Michistory〕vol.1、三重歴史文化研究会、1990年。〕
・伊藤裕偉「伊勢の中世遺跡・土器から東海を見る」〔鍋と甕
そのデザイン〕第4回東海考古学フォーラム、1996年。〕
- ②伊藤裕偉「近畿自動車道(勢和～伊勢線)埋蔵文化財発掘調査
報告 第3分冊 梅ノ木遺跡」、三重県埋蔵文化財センター、
1989年。
- ③以下信楽産甕については下記の文献を参考にしている。
・木戸雅寿「中世陶器(信楽)」〔概説中世の土器・陶磁器〕、
日本中世土器研究会、1995年。〕
- ④森前勉・伊藤久嗣「大山田村風呂谷館跡」〔昭和58年度県営は
場整備事業発掘調査報告〕、三重県教育委員会、1984年。〕
- ⑤以下信楽産鉢については下記の文献を参考にしている。
・山田猛「下郡遺跡群出土の措鉢」〔Michistory〕vol.1、三
重歴史文化研究会、1990年。〕

番号	実測番号	種類	器種等	グランド	出土位置	法 量 (cm)			胎 土	焼 成	色 調	残 存	備 考
						口 径	器 高	その他					
1	003-05	土師器	罎	c6	SB15 (c6(p5))	不明	残存部1.8cm		密	良	10YR7/4 に近い黄緑	口縁部小片	南伊勢系
2	001-04	土師器	皿	c5	SB16 (c5(p1))	10.0cm	1.8cm		やや密	良	7.5YR8/4 浅黄緑	口縁部の1/4	在地産?
3	003-06	土師器	罎	c6	SB16 (c6(p3))	不明	残存部2.2cm		密	良	10YR7/4 に近い黄緑 (断)2.5Y 5/1	口縁部小片	南伊勢系
4	003-07	土師器	罎	c6	SB16 (c6(p3))	不明	残存部2.0cm		密	良	10YR7/4 に近い黄緑	口縁部小片	南伊勢系
5	003-04	土師器	羽蓋	c6	SB16 (c6(p3))	不明	残存部3.2cm		密	良	10YR8/2 灰白 (断)2.5Y 5/1 黄灰	口縁部小片	南伊勢系
6	003-02	陶器	甕	c5	SB16 (c5(p2))	不明	残存部5.5cm		粗	良	(外)10YR7/2a に近い黄緑 7.5YR5/3 に近い褐 (内)10YR8/3 浅黄緑 (断)10YR8/1 黄灰 2.5Y 6/1 黄灰	口縁部小片	信楽産
7	001-02	土師器	罎	b7	SD4	不明	残存部 3.5cm		密	良	(外)7.5YR5/2 褐赤 7.5YR5/3 に近い褐 (内)10YR8/3 浅黄緑 (断)10YR8/1 黄灰	口縁部小片	南伊勢系
8	004-03	瓦葺土器	鉢	f10	SD6	不明			密	良	N 5/R 2 4 濃いN4/1 灰 (断)2.5Y 8/2	底部小片	
9	003-03	陶器	鉢	c9	SE13(3)	不明	残存部5.7cm		粗	良	7.5YR6/6 橙 7.5YR5/6 黄褐色	口縁部小片	信楽産
10	003-01	陶器	甕	c9	SE13	不明	残存部6.3cm		粗	良	(外)5YR7/4 に近い橙 5YR5/4 に近い赤褐 (内)7.5YR6/4 に近い橙 10YR7/2 に近い黄緑	口縁部小片	信楽産
11	004-01	鉄製品	釘	c9	SE13(2)	長さ 3.5cm	厚さ 0.45cm	幅 0.4cm					
12	006-01	木製品	不明	c9	SE13	長さ 16.8cm	厚さ 1.7cm	幅 7.0cm					
13	002-04	土師器	皿	b12	SK11	不明			密	良	10YR7/3 に近い黄緑 10YR7/4 に近い黄緑	口縁部小片	へん黒 在地産?
14	001-05	土師器	小皿	c6	c5(p4)	不明	7.4 cm	1.4 cm	やや粗	良	(外)7.5YR5/4 に近い褐 5YR6/2 黄緑 (内)7.5YR5/4 に近い褐 7.5YR8/4 浅黄緑	口縁部の1/2	在地産
15	001-03	土師器	皿	c6	c6(p2)	不明	残存部1.1cm		やや密	良	(外)7.5YR7/4 に近い橙 10YR5/2 灰褐 (内)2.5Y 5/1 黄灰	2/3	在地産
16	002-05	土師器	罎	c5	c5(p1)	不明	残存部1.9cm		密	良	7.5YR8/4 浅黄緑 7.5YR5/2 灰褐 7.5YR4/2 灰褐	口縁部小片	南伊勢系
17	001-01	土師器	罎	c5	c5(p1)	30.8cm	残存部4.1cm		密	良	(外)5YR3/2 褐赤褐 5YR5/2 赤褐 (内)7.5YR7/3 に近い橙 7.5YR6/3 に近い橙 (断)N3/黒灰	口縁約1/12	南伊勢系
18	002-03	陶器	碗	b6	c6(p4)	不明	残存部4.2 cm		やや密	良	5Y7/2 灰白 5Y7/3 浅黄 N8/灰白	口縁部 1/5	
19	002-02	陶器	漆鉢	c6	c6(p2)	不明	残存部6.9cm		粗	良	(外)N6/R5c N5/R5の周 (内)10YR8/1 灰白 (断)7.5YR5/1 黄灰	口縁部小片	信楽産
20	001-06	陶器	甕	c6	c6(p7)	不明	残存部6.0cm		粗	良	(外)7.5YR7/2 明褐色 7.5YR7/3 に近い橙 (内)2.5Y 7/1 灰白 2.5YR5/1 黄灰	口縁部小片	信楽産
21	002-02	陶器	甕	c7	c7(p1)	不明	残存部4.4cm		やや良	良	(外)7.5YR7/2 明褐色 7.5YR7/3 に近い橙 (内)5YR5/2 灰褐 5YR5/3 に近い赤褐 (断)2.5Y 7/1 灰白 2.5 Y 7/2 黄灰	口縁部小片	信楽産
22	004-02	鉄製品	鎌	b 5	b5(p4)	残存長 4.5cm	最大厚7.5mm						
23	005-03	土師器	皿	c6	包含層	7cm	1.5cm		やや良	やや良	7.5YR8/4 浅黄緑 N 5/0 灰	1/2 残	在地産
24	005-04	土師器	罎	c6	包含層	不明	残存部2.9cm		やや良	やや良	10YR8/3 浅黄緑 7.5YR4/2 灰褐 (断)N3/黒灰	口縁部小片	南伊勢系
25	005-02	土師器	罎	b7	包含層	不明	残存部3.3cm		やや良	やや良	10YR8/3 浅黄緑 5YR3/2 褐赤褐	口縁部小片	南伊勢系
26	005-02	石製品	砥石?		甕土中	7.0cm×5.9cm	厚さ 1.4cm						
27	005-01	石製品	五輪塚		調査区周辺 表探	18.6cm×14.8cm							

第5表 出土遺物観察表

V 三重県野添遺跡から産出した昆虫化石

1 はじめに

昆虫はすべての生物群のなかで最も種数が多く、水中（水生昆虫）、地面上（地表性歩行虫）、植物上（樹上性昆虫）など、多様な生活空間に適応して生活している。食性も食植性から、食肉性・食糞性・食屍性など多岐にわたる。

昆虫の外骨格はキチン質で構成されており、死後土中に埋もれてからも腐ることなく保存される。また、昆虫は移動・跳躍に適した3対の脚と飛翔用の2対のはねを有し、環境変化に対する応答性が最も鋭敏な生物化石といえることができる。遺跡をめぐる古環境の復元にあたり、昆虫化石（昆虫遺体ともいう）が重要であるのはこのような理由による。

小論では、三重県阿山郡伊賀町野村に所在する野添遺跡の遺物包含層より発見された昆虫化石と、それから導かれた古環境について述べる。

2 試料および分析方法

昆虫分析試料は、平成13年度県営ほ場整備事業（倉部川沿岸地区）に伴う三重県野添遺跡の中世の井戸（SE13）内堆積物より検出されたものである。SE13は、長径1.9m・短径1.7m、深さ約2mの遺構として検出され、井戸枠や曲物等は確認されていないものの、井戸であった可能性が高いと考えられている。昆虫化石を含む堆積物は、暗褐色のシルト層ないし泥質堆積物であり、同層からは昆虫化石以外に木片や炭質物などが確認されている。

昆虫化石は、三重県埋蔵文化財センターの小林俊之氏により水洗浮遊選別法により抽出され、筆者のもとには、小型シャーレの中に入った状態で届けられたものである。昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で1点ずつ比較・検討のうえ実施した。

3 同定結果

以下に、試料中に認められた昆虫化石の同定結果について記す。

●標本1（野添遺跡・SE13）

ヒメカンショコガネ *Apogonia amida* Lewis
左上翅下半部（長さ4.0mm）

●標本2（野添遺跡・SE13）

ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky
右上翅（長さ11.0mm）

●標本3（野添遺跡・SE13）

セアカヒラタゴミムシ *Dolichus halensis* (Schaller)
左上翅下半部（長さ6.5mm）

標本1および2は、いずれも人間が植栽した畑作物・果樹などを食害する人里昆虫である。標本3については、人間の居住域付近に生活する地表性歩行虫として知られる。

4 考察

昆虫化石の産出点数が少なく、その組成から野添遺跡周辺の古環境に関する正確な情報を引き出すことは困難であるが、分析試料中より見いだされた乏しい昆虫組成をもとに、中世後半（15～16世紀）における古環境について述べる。

井戸内の試料から、セアカヒラタゴミムシ *Dolichus halensis* の左上翅下半部（標本3）が検出された。本種は、本来、畑作地や人家周辺に生活し、攪乱地表面の存在を示唆する地表性歩行虫である。

同じ試料から、食植性昆虫が2点検出されている。うち1点はヒメカンショコガネ *Apogonia amida*（左上翅）、もう1点はヒメコガネ *Anomala rufocuprea* の右上翅であった。両種とも森林中に生息することではなく、人の介在した二次林の樹葉や、各種畑作物の葉を加害する農林有害昆虫として著名な陸生の食植性昆虫である。筆者が実施してきたこ

れまでの昆虫分析結果からすると、両分類群は日本各地の中世以降の地層中より顕著に増加することが知られており、これらは畑作物の存在や、里山開発に伴う植生変化を示すものとして重要である。

野添遺跡から検出された昆虫化石は、井戸が埋積される際、これを埋める土中に存在したか、井戸周辺に生息していた昆虫が何らかの理由で埋土中に紛れ込んだものと考えられる。地表性歩行虫であるセアカヒラタゴミムシ、および生育環境を異にする2種の食植性昆虫の出現は、人間の自然改変に伴う周辺地域的人為的攪乱の影響を強く示唆しており、このことは食害性昆虫が大増殖したとする中世における日本各地の昆虫分析結果ともよく符合している。

分析試料中より見いだされた食植性のヒメコガネからは、野添遺跡付近に人間が植栽したマメ科植物あるいはブドウ・カキ・クリなどの果樹等が栽培されていたことを示している。いっぽう、ヒメカンシヨコガネは主に甘しょ（サツマイモ）の葉を加害する畑作物害虫であり、遺跡一帯に甘しょなどの畑作物が存在したことを示唆している。このため、野添遺跡の中世城館周辺は、畑作物や果樹などが植栽され、ところどころに裸地的な空間が広がる人為度の高い環境であった可能性が高いと考えられるが、その詳細については昆虫化石を含めさらに多くのデータを集めて考察していくべきであろう。（森 勇一）

【註】

- ① 森 勇一「昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元」『第四紀研究』33(5)、1994年、p331-349
- ② 森 勇一「愛知県一宮市大毛沖遺跡から得られた昆虫群集について」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集大毛沖遺跡』愛知県埋蔵文化財センター、1996年、p188-194
- 森 勇一「虫が語る日本史～昆虫考古学の現場から」『インセクタリウム』34(1)・34(2)、1997年、p18-23、p10-17
- 森 勇一「昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境変遷史、歴史国際シンポジウム「過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史」」『国立歴史民俗博物館研究報告第81集』国立歴史民俗博物館、1999年、p311-342
- ③ 森 勇一「昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境変遷史、歴史国際シンポジウム「過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史」」『国立歴史民俗博物館研究報告第81集』国立歴史民俗博物館、1999年、p311-342

野添遺跡から産出した昆虫化石の顕微鏡写真（PL. 9）

1. ヒメカンシヨコガネ *Apogonia amida* Lewis
左上翅下半部（長さ4.0mm）
2. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky
右上翅（長さ11.0mm）
3. セアカヒラタゴミムシ *Dolichus halensis* (Schaller)
左上翅下半部（長さ6.5mm）

VI 結 語

1 方形区画の屋敷地

野添遺跡では中世後期の遺構として掘立柱建物3棟(SB15・16・17)、井戸1基(SE13)、土坑3基(SK11・18・19)建物内土坑1基(SK1)、不明遺構1基(SZ9)、溝3条(SD2・4・5・6)を確認した。

検出された掘立柱建物3棟はほぼそれと同一の方向であるSD2によって囲まれている。SD2は逆L字状になっており、南端から6mの間隔を置いてSD6が存在する。

SD2・6によって囲まれる部分については明らかに溝によって区画された屋敷地の遺構として捉えられる。この東隣にはSD4・5がSD2・6とほぼ同一方向でL字状に配置され、なんらかの区画溝であり、屋敷地と考えるのが良さそうである。

SD4・5によって区画される部分についてはそのほとんどが調査区外であるため、以下ではSD2・6によって区画された屋敷地について見てみたい。

この区画の内部には掘立柱建物3棟(うち1棟は土坑を伴うと考えられる)と井戸1基、土坑2基、不明遺構1基があり、屋敷地に必要なものはすべて検出している。区画溝SD2とSD6の間には6mの間隔があり、この屋敷地の入口であったと理解され、東側に入口を持っていたものと考えられる。しかし、この区画も調査区の間隔で西端は確認することができず、その規模については不明。南端についてもSD6が消滅していくことから幾分か削平を受けていると考えられ、不明である。

内部の遺構については、掘立柱建物は柱掘形を持つもので構造的に複雑なものだが、井戸については枠等の施設は確認しておらず、素掘りであった可能性が高い。区画溝の規模についてはかなりの削平を受けていることが考えられ、正確な幅・深さについては不明である。しかしそれでも比較的小さい規模であったことが予想される。

ここまで見てくると、野添遺跡の屋敷地遺構は

「中世城館跡」ではないか、という考えが浮かぶ。調査区外を調査できなかったため不明な点も多く、土塁の有無についても確認できていない。しかし区画溝の規模、区画内部の構造からは決して地域の雄とは言いがたい。

元々伊賀国に見られる中世城館には同一集落内に幾つもの城館が見られ、その状況が伊賀惣国の様相を示す、と言われてきた。しかし従来「中世城館」と呼ばれてきたものは何なのか。中世城館には様々な規模のものがある。「都市」「村落」問題と同じことがここでも言えるように思われる。そこでここでは「中世城館」という用語は使用せず、単なる「屋敷地」とした。

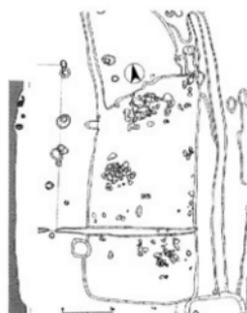
2 SZ9について

屋敷地内の遺構SZ9では、付設遺構としてSZ12、SK18、溝状遺構、面を描えると思われる石、ピット群を検出している。第3章でも触れたようにその埋土の状況から貯水土坑と考えられる。野添遺跡のある旧伊賀国内ではこれまでの発掘調査で多くの貯水土坑が検出されている。ここでは伊賀での事例と野添遺跡のSZ9を比較してその性格に追ってみたい。

伊賀ではこれまで貯水土坑とされる遺構が6遺跡で確認されており、すべてが中世城館跡から検出されている。(第21図)

まず大山田村風呂谷館跡のSD35だが、東西5.2m南北10.5mの規模を持ち、その遺構にはいくつかの溝が繋がっている。また内部からは石列が検出されており、調査中も内部に石がいくつも見つかり、石列は周囲をめぐっていたものと考えられている。

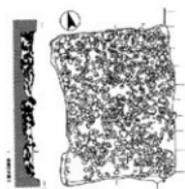
次に上野市蓮花寺跡推定地遺跡SK25・SK26・SK30だが、それぞれ東西4m南北7.5~9.0m、東西6.0m南北7.3m、東西2.4m南北3.2mの規模を持つ。SK25・26にはいくつかの溝が繋がる。SK30については遺構の東側は堀と



蓮花寺跡推定地遺跡 SK 25



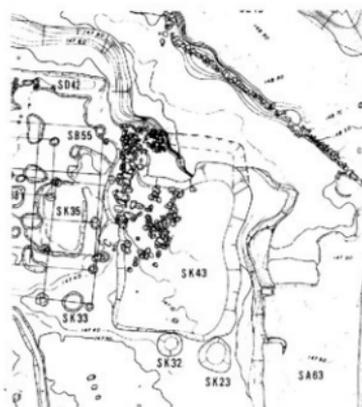
蓮花寺跡推定地遺跡 SK 26



蓮花寺跡推定地遺跡 SK 30



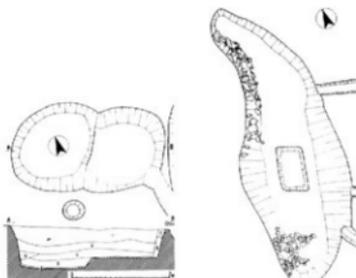
菊永氏城跡I郭 SK 24



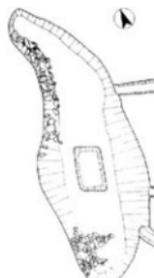
箕升氏館跡 SK 43



風呂谷館跡 SD 35



神ノ木館跡 SP 22



神ノ木館跡 SP 45

第21図 伊賀の池状遺構 (1 : 100) [風呂谷館跡 SD 35・菊永氏城跡I郭 SK 24は1 : 200]

なっている。またSK 26・30には埋土中に小石が多く入る。平面図では石敷遺構に見えるが、断面図からの判断ではそうではなさそうである。

次に上野市箕升氏館跡SK 43だが、東西5m南北8mの規模を持つ。遺構の北西部に小石が見られるが、調査担当の森川常厚氏によると敷いてあるような状態ではなかったという。

次に阿山町菊永氏城跡I郭SK 24だが、東西3.4m南北4.0mの隅丸方形を呈する。2本の溝とつながっており、東側は土塁になっている。報告書によると「水溜遺構」とされている。

次に上野市安田氏館跡であるが、報告書未刊のため詳細は不明。しかし、現地説明会資料からは調査区南東部において大型土坑が見られる。森川常厚氏はこれを「貯水状土坑」とみている。

最後に上野市神ノ木館跡SP 22・SP 45であるが、SP 22は径1.8mの遺構が2つあるような形態を為しているが、土層からは1つの遺構として捉えられる。埋土の底は青灰色の粘質土である。また遺構側面には茶褐色粘質土・黄褐色粘土が見られ、粘土を貼り付けていたことも考えられるのではなかろうか。

またSP 45は最大幅2.1m長さ6mの楕円形を呈する遺構で、中央部には0.9m×0.8mの方形土坑がある。遺構北西部と南部には小石溜まりのようなものが見られる。3本の溝とつながっている。神ノ木館跡ではこの他SP 23・SP 49も「水溜遺構」とされている。

以上が伊賀に見られる貯水土坑であるが、ここまで見てきて、野添遺跡のSZ 9といつかの共通点が見られた。

まずひとつは風呂谷館跡に見られる石列である。これは遺構の周囲を囲むように配列されている。野添遺跡SZ 9においても西側に面する石が2つ検出されており、形状から周囲を囲むように配列されていた可能性が考えられる。

二点目は蓮花寺跡推定地遺跡SK 26・30や箕升氏館跡SK 43に見られた小石溜まりである。一見石敷遺構に見えるが、断面その他から敷いていないと判断でき、野添遺跡SZ 12と大変類似している。

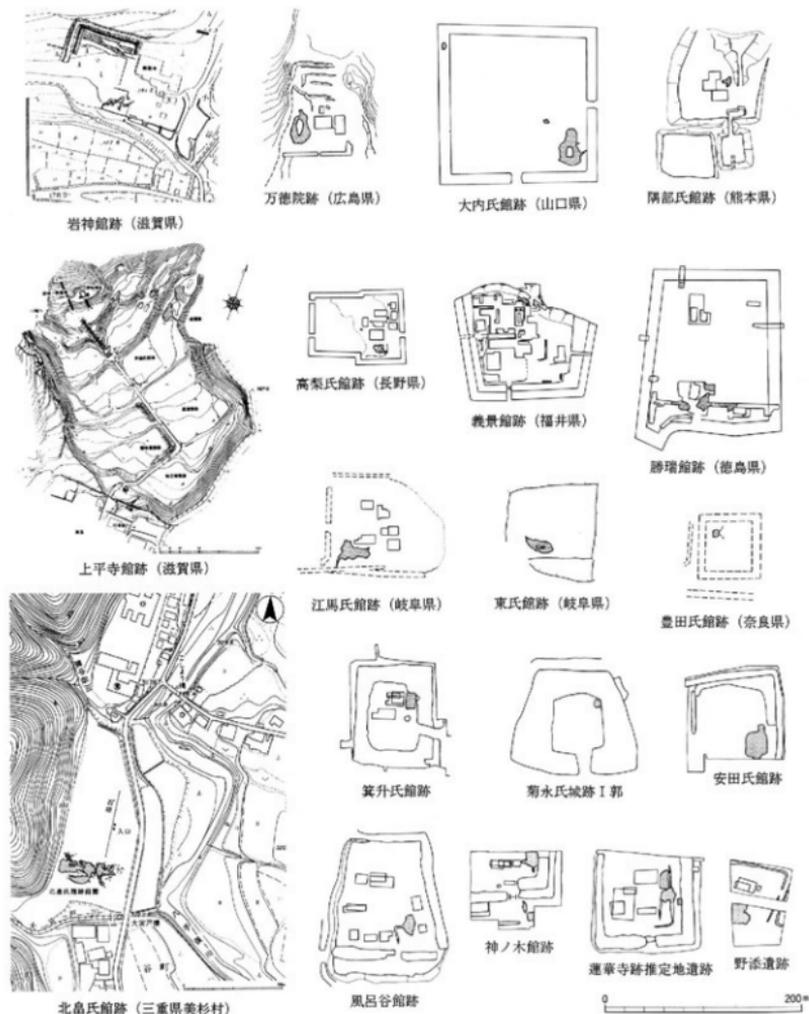
三点目はすべての遺構埋土が粘土もしくは粘質土

で、なかには神ノ木館跡のようにヘドロ状であったものもある。

以上のことから野添遺跡SZ 9は、伊賀で検出されている貯水土坑と同じ性格の遺構であった可能性が高い。

それではこの貯水土坑は何なのか。森前稔・伊藤久嗣両氏は風呂谷館跡報告書中で「井戸の排水や雨水を溜めた池かもしれない」と指摘し、駒田利治氏も神ノ木館跡報告書中で「簡単な池のようなものかも知れない」と指摘している。また竹田憲治氏も池の可能性を指摘している。しかしこれまでは可能性の提示のみであり、詳細には検討されてこなかった。ここで伊賀に見られる貯水土坑の配置について見てみたい。第22図は前述の貯水土坑の屋敷地内の配置図である。郭内の配置については森川常厚氏により逆E字形のD区にすることが言われているが、それに加えて土塁がある場合には区画の隅に存在するものが多いようである。また遺構が溝とつながっている例も多い。埋土の状況と合わせ考えると、明らかに水を溜めたり、排したりしている状況がわかる。さらにそのほとんどが区画内の主屋と考えられる建物のそばに土坑が存在する。菊永氏城跡I郭については区画の入口からはS A 5で遮断された場所に存在する。

これらのことから考えると、伊賀の貯水土坑は水が溜められる点、意図的に石を配置する必要がある点、主屋から貯水土坑が臨める距離にある点、区画入口から溝により視覚的に遮断されるものもある点という状況が挙げられよう。単なる洗い場等の施設ではこのような状況は不要である。屋敷地内でこのような施設を設けるとすれば、それはやはり庭池(園池)であった可能性が高いのではないだろうか。野添遺跡SZ 9も園池遺構と考え、付設遺構の東側ビット群もなにかしらの構造物の跡あるいは植物などを植えて目隠し状のものをつくっていた可能性も考えられるのではなかろうか。また野添遺跡の主屋はSB 15もしくはSB 16なのであろうが、そこからSZ 9を見ると、その背景に伊賀の霊峰霊山が見える(写真PL 1参照)。調査中にも感じたのだが、夕日に映える霊山は誠に絶景であった。まさに霊山を借景として捉えることができるのである。



第23図 中世居館の庭園遺構と伊賀の貯水土坑 (1 : 5,000)

ところで前節でも触れたように野添遺跡は決して規模の大きな屋敷地とは言えない。ではなぜそのような屋敷地に庭池がつくれるようなことがあったのだろうか。

第23図は伊賀の池状遺構と全国にある中世後期の庭園遺構を同一縮尺で載せたものである。全国にあるものは大名クラスや国人領主クラスの遺跡に存在している。規模の大きい居館ほど複雑な平面形態をした庭園遺構が築かれている。それに対し、規模の小さい豊田氏館跡には単なる円形の庭園遺構が存在するのみである。伊賀に見られる池状遺構はこの豊田氏館跡に類似する。伊賀の小規模城館でも園池を持つ可能性は十分に考えてよいのではないだろうか。ただし他地域では小規模な館跡が園池を持つことは少ないが、伊賀では多くの事例が確認できる。このことの意義については今後の課題としたい。

また伊賀の貯水土坑をさらに園池遺構であることを証明するためには埋土の土壌分析が不可欠である。今回の調査では筆者の認識不足により行なわれなかった。今後伊賀で貯水土坑が検出された場合はぜひ土壌分析を行なうことをお願いしたい。

3 野添遺跡近隣の景観復原

野添遺跡は、調査区南西約60mに野村城館群が存在する。調査区周辺には屋敷地が広がっていた可能性が考えられ、同一集落として見なすことができる。また第Ⅱ章でも触れたように周辺には多くの中世城館も存在する。そこでここでは近隣の遺跡と合わせて中世後期の野村について見てみたい。

まず本遺跡の南方には現在の国道25号線と平行して近世の大和街道が通る。現在の集落はこの近世大和街道に沿う形で存在することがわかる。現在の集落景観は近世の街道整備時にできたものと思われる。この近世大和街道は野添遺跡の南東約100mの地点で鋭形に曲がる。この地点には野村辻大師堂があるが、これは近世の創建であると伝えられる。

次に中世城館について見てみたい。まず本遺跡の南西約60mには野村城館群があり、鳥喰氏宅址、富井氏宅址、増田氏宅址からなる。野村城館群の南東部には現富田氏宅にも逆L字状にある土塁も見られ

る。また富井氏宅址の南には杉本宅址がある。

野村ではないが、中柘植には北村氏城跡と北村氏館跡、藤島宅跡が存在する。東側の上柘植には近世大和街道沿いに梅田氏館跡がある。

神社寺院には神明神社跡、極楽寺がある。神明神社跡は時代・規模等不明の遺跡で、極楽寺は曹洞宗の寺院で近世の創建とされる。

これらの遺跡を第24図の東から西へ向かって見ていきたい。梅田氏館跡から近世大和街道沿いに西へ向かうと、近世の街道は野村辻大師堂で曲がる。ところが、このまま真っすぐ行くともうひとつ道があることに気付く。この道沿いには野村城館群があり、近世寺院だが極楽寺という寺院も存在する。杉本宅址もやや離れているが、この道を意識していると見てよいであろう。富井氏宅址の東側には時期不明だが、神明神社跡もある。この道は北村氏館跡の南方を通り、藤島宅跡に至る。

ここまで見てくると、野添遺跡付近の中世城館のほとんどがこの道沿いに位置することがわかる。中世の遺跡の集中度から考えると、この道が中世の大和街道と考えられるのではないだろうか。

また野村辻大師堂の前には文政12年銘「是よりいちいの道」という道標が立てられている。ここは現在の伊賀草津線沿いにあり、滋賀県方面への主要幹線道路である。近世の時点ではこの道標で大和街道と滋賀県方面への道が交差していたと考えられる。中世にもここから滋賀県方面へ抜ける道があった可能性も考えてよいのではないだろうか。そして集落の展開も、中世から近世へ移ることにより南へ移動した可能性も考えられる。今回の発掘調査でも近世の遺構は調査区南半にしかない。これはここからも集落が街道の移動と共に南へ移ったと考えられるのではないだろうか。

4 中世後期の柘植

第Ⅱ章でも見たように、柘植には多くの中世城館がある。ここでは広義の柘植における中世城館の様相を柘植三方の城館を中心にしてみたい。

下柘植の日置氏城跡・日置氏南城跡は、名阪国道で分離されているが、ひとつの城とされる。立地と



第24図 野添遺跡周辺の景観復原図 (1 : 5,000)

しては下柘植集落とは柘植川を挟んだ対岸の丘陵上に位置する。日置氏館跡は愛田に存在し、立地としては丘陵上に位置する。日置向城跡は館跡とは愛田川を挟んだ対岸の丘陵上に位置する。

中柘植の北村氏城跡は丘陵上に位置する。それに対して北村氏館跡は平野部で現集落の北端に位置する。城跡とは倉部川を挟んだ対岸にある。

上柘植の福地氏城跡は丘陵上に位置する。これも上柘植集落とは柘植川を挟んだ対岸に位置する。それに対して館跡とされる場所は城の西山下にあり、下柘植や中柘植のそれとは異なる。

野村の城館には上中下柘植のように突出した規模の城館はなく、すべて方形単郭のものである。ただし、鳥喰宅址や富井氏宅址のように密集した形であることは特徴と言える。

これらのことから、柘植三方の城館はいずれも現集落とは川を挟んだ対岸に位置する。特に北村氏の城館は山城と里城の2種があり、里城は集落内にある。日置氏の館跡は山城西方の丘陵上にあり、現下柘植集落には現段階では城館遺構はない。福地氏の館跡は城跡に隣接するが、現集落内に城をもつわけではない。上柘植内にはいくつかの中世城館を確認しているが、大規模なものはない。ただ柘植町は開発が一番激しいために既に破壊されていて不明になっている可能性もある。

上柘植の場合は、現柘植町内に比較的多くの城館が存在する。中でも浜地氏城跡などは比較的大きな城館であり、上柘植には福地氏以外にもある程度の大きな勢力を持った土豪が存在したことが考えられる。下柘植の場合は日置氏以外に高島氏館跡などが知られる。中柘植は北村氏の城跡のみで他は見られない。北村氏と浜地氏は旧上柘植天神社の棟札に「文龜元年(1501)11月3日、願人北村殿、浜地殿、同村三十人」と見られ、北村氏と浜地氏に大きな格差はないと見るのがよいのではないかと。

北村・浜地の関係を見るように、柘植三方は各地区の支配者ではなく、あくまで有力者である可能性を考えると、北村氏の山城・里城の関係にもひとつの可能性が考えられる。それは、在地の有力者である柘植三方は在地の出身で、元々集落に住んでいた、ということである。すると城の系譜としては里城⇒

山城であることになる。このことを福地・日置に単純にあてはめるわけにはいかないが、やはり集落内に城を持っていた可能性も考えられよう。

伊賀は「惣国一揆」と表現されるように、突出した大名権力は存在してこなかったと考えられている。北村・浜地の関係を見ると、柘植三方の城館は決してその地域ごとの支配者層の城館ではなく、あくまで単なる有力者層の城館と捉える必要があるのではないだろうか。そんな中での野村城館群や野添遺跡は、柘植三方とは「支配—被支配」の関係ではなく存在したものと考えられるのではないだろうか。

(小林俊之)

〔註〕

- ①雲渡町野呂氏館跡などでは石組井戸が多く見られる。筆者は中世後期は石組井戸が主流になってきているように思っている。
- ②駒田利治「伊勢・伊賀における城館跡調査—小規模城館を中心に—」(第8期全国城跡研究会セミナー シンポジウム「小規模城館」研究報告編)1992年。
- ③指塚「三重県南部(南伊勢・志摩・東紀伊)の中世集落遺跡の動向」(『東海の中世集落を考える—考古学から中世のムラをどう読み解くか—』第9回東海考古学フォーラム尾張大会資料集、2002年。)など。
- ④森前幸・伊藤久嗣「大山村村風呂館跡」(昭和58年度県営は場整備事業発掘調査報告 三重県教育委員会、1984年。)
- ⑤福田典明「蓮花寺地蔵堂遺跡発掘調査報告」(上野市教育委員会・上野市遺跡調査会、1997年。)
- ⑥森川常厚「箕升氏館跡」(『伊賀国府跡(第5次)・箕升氏館跡』三重県歴史文化財センター、1993年。)
- ⑦駒田利治「朝水氏城跡発掘調査報告」(阿山町教育委員会、1987年。)
- ⑧三重県教育委員会「塚本氏館跡・安田氏館跡」(1986年。)
- ⑨森川常厚「伊賀地域中世城館の部内区画と遺構配置」(『研究紀要』第4号、三重県歴史文化財センター、1995年。)
- ⑩駒田利治「上野市神ノ木館跡」(昭和54年度県営は場整備事業発掘調査報告)三重県教育委員会、1980年。)
- ⑪竹田憲治「北伊勢・伊賀の中世集落」(『東海の中世集落を考える—考古学から中世のムラをどう読み解くか—』第9回東海考古学フォーラム尾張大会資料集、2002年。)
- ⑫前掲⑩。野添遺跡の場合は全体が不明なため、その配置についてはわからない。
- ⑬人口からの現代的な遡進は、いわゆる「ハレ」の間の意識の存在が窺える。(小野正敏「戦国城下町の考古学」(講談社新書メチエ、1997年。)) 箕升氏館跡等に見られる区画の隅にあるものも現代的遡進効果と考えるとよいのではないかと。
- ⑭田中哲雄「日本の美術429 発掘された庭園」(至文堂、2002年。)を参考に作成した。
- ⑮「歴史の道調査報告書 大和街道・伊賀街道・伊勢別街道」(三重県教育委員会、1983年。)
- ⑯「三重県地名」
- ⑰野村の遺跡については以下の文献を参照した。
【伊賀町遺跡地図】(伊賀町教育委員会、1992年。)
【伊賀の中世城館】(伊賀中世城館調査会、1997年。)
【城館調査の記録】(伊賀中世城館調査会、2000年。)
- ⑱「いちいの道」とは磯野の道のことで、甲冑方面への道である。

PL1



調査区北部全景（北から・左上の山は霊山）



調査区南部全景（南から）



SB 15・16 (西から)



SD 2 (東から)

PL 3



SD 4・5 (北東から)



SD 5 (北から)



SK 18 (南から)



SK 19 (北から)

PL 5



SZ 9 全景 (南から)



SZ 9 石出土状況 (西から)



S Z 9 内東側不明ピット群検出状況 (西から)



S Z 12 (北東から)

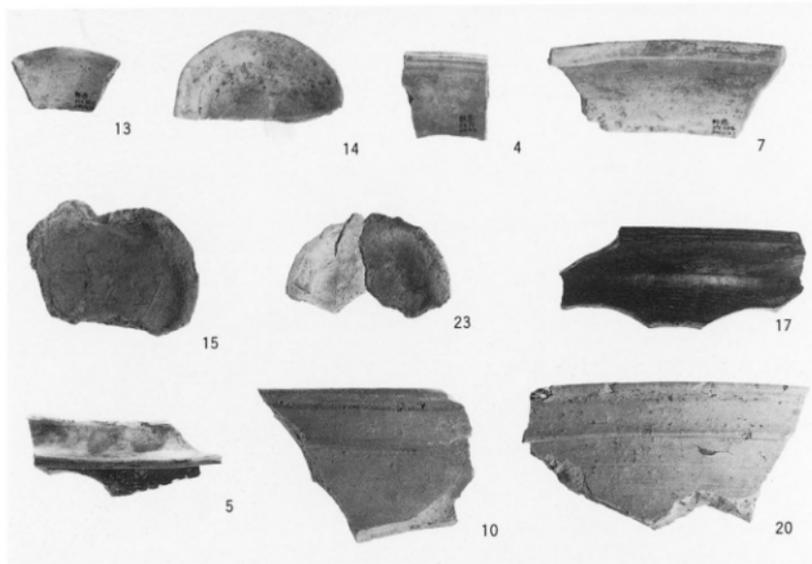
PL 7



SE 13 (南から)



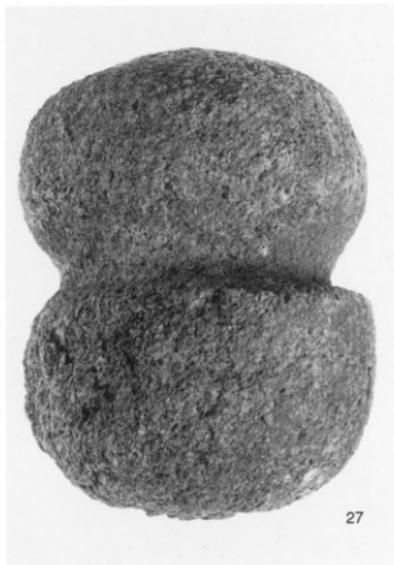
SD 10 (東から)



出土遺物①



出土遺物②



表探遺物



SE 13出土の昆虫遺体 (標本1)



SE 13出土の昆虫遺体 (標本2)



SE 13出土の昆虫遺体 (標本3)

報告書抄録

ふりがな	のぞえいせきはつくつちょうさほうこく							
書名	野添遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	245							
編著者名	小林俊之 森勇一							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	2003年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のぞえいせき 野添遺跡	あやまぐんいがちよう 阿山郡伊賀町 のむらあざのぞえ 野村字野添	24481		134度 50分 8秒	136度 14分 11秒	20011107) 20011228	1,100㎡	県営ほ場整備 事業（倉部川 沿岸地区）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
野添遺跡	集落跡	室町時代 江戸時代	掘立柱建物 区画溝 井戸 池状遺構 土坑		土師器 陶器 磁器 木製品 鉄製品			

三重県埋蔵文化財調査報告 245

野添遺跡発掘調査報告

2003.3発行

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷者 東海印刷株式会社
